

街の 灯り 物語



灯り——それは

そこに暮らしがある証

さまざまな心模様が描かれ

物語が紡がれている証

迎えてくれる灯り

見送ってくれる灯り

そして見守ってくれる灯り

街それぞれに灯りがあり

人それぞれに

心に残る灯りがある

その一つの物語

ラ・セーヌ 光のメッセージ

パ
リ・セーヌ川にかかる二十五の橋を、日本の四季をイメージした色で照らし出す。鮮やかな色彩とともに浮かびあがる浮世絵、能面、障壁画……百五十の日本の「美」が次々と岸壁に映し出される。

二〇〇八年秋、セーヌ川一帯を、光で「和の色彩」に染めあげた「ラ・セーヌー日本の光のメッセージ」。日仏交流百五十周年記念プロジェクトの一環として企画した、光のショーだ。ふだん橋に施しているライトアップを消す、動く船の上から映像を照射する——前例のないことばかりだったが、そこは「芸術の都」、そして「光の街」パリ。新たな試みを受け容れる、懐の深さがある。パリっ子たちも足を止めて見入り、大いに楽しんでくれた。

ときとして光は、文字よりも雄弁に人の心に訴える。その奥深さを教えてくれたのが、パリ

街の 灯り 物語

「光に包まれる至福」を 体感してほしい

石井リーサ明理 照明デザイナー

だ。デザインの勉強を深めようと渡ったフランスでは、都市づくりのなかで照明がひときわ存在感を持って設計されていた。光のシンボリックな部分と情緒的な部分を熟知したうえで、建物ごとに「点」としてライトアップするのではなく、街全体で「面」として光を構築していく。「光」は、建築も芸術も都市も包括する、幅広く面白いテーマだと気づき、照明デザインを志した。

以来、さまざまな国でプロジェクトに参加している。興味深いのは、光の好みが国によって違うこと。例えば、日本人は障子を透かしたような柔らかな光、ふわっと拡散する灯り、そして微妙な陰影のグラデーションを好む。対してフランス人はキャンドルのゴールドの灯り、くつきりとした光と影のコントラストが生むドラマティックな雰囲気の魅力やすい。だからプランを考えるとときは、その土地の風土、気候、文化などに目を向け、地理的・歴史的文脈を念頭にストーリーを紡ぎ出す。

光の魅力は、映像やライトアップを「見る」ことだけではない。光に「包まれる」感覚——光の粒を全身に浴び、光に抱かれる感覚を味わってほしい。光をデザインすること、それは光に包まれた、かつてない心地よい空間をつくり出すことだと、私は思っている。

●

日仏交流 150 周年記念プロジェクト
「ラ・セーヌー日本の光のメッセージ」
～ 25 橋と岸辺を彩る和のこころ～
総合プロデュース：石井幹子
光のデザイン：石井幹子／石井リーサ明理



いしいリーサ・あかり 照明デザイナー
1971年東京都生まれ。東京芸術大学卒、東京大学大学院修士課程修了。大学院在学中のパリ留学をきっかけに、照明デザイナーの道へ。ニューヨークと東京、パリの照明デザイン事務所を経て、2004年独立、パリと東京を基点に自らの事務所「I.C.O.N. (アイコン)」を設立。世界を舞台にグローバルな活動が続ける。
<http://www.icon-lighting.com/#accueil.html>

